

実習報告（基盤教育実習）

深い思考を伴うパフォーマンス課題の検証 －中学校英語科の授業において－

副島 佳織（授業実践探究コース）

【探究実習のテーマと設定の理由】

平成28年3月に中央教育審議会教育課程部会外国語ワーキンググループは、外国語教育における観点別評価・たたき台案において、中学校の外国語の「思考・判断・表現」の観点での目標を「互いの考えや気持ちなどを外国語で適切に伝え合っている」ことだと示している。自分の考えや気持ちを表現するためには、その物事を多様な視点から捉え、深く思考する必要がある。

本研究では、「思考力」を見方・考え方を働かせた思考力と定義する。新学習指導要領の方向性を示した中央教育審議会答申（平成28年12月）では、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方のイメージについて「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、目的・場面・状況等に応じて、情報や自分の考えなどを形成、整理、再構築すること」としている。異なる文化を持つ人々と主体的に関わる能力は、これからの社会を生きるために必須のものであると考える。

そこで、生徒の思考力を育むために、「逆向き設計」論に基づくパフォーマンス課題を設定した授業を実践する。「逆向き設計」論（Wiggins & McTighe, 2012）とは、何を身に付けさせたいかという教育の成果から逆向きに授業を設計し、また、指導が行われた後で考えられがちな評価方法を先に構想するものである。評価方法についてはパフォーマンス評価を実施し、従来の客観テストでは見えにくかった思考力や表現力を可視化する。そこで基盤教育実習（以後、探究実習とする）では授業中の生徒の観察を通して、生徒はどのような活動に意欲的に取り組んでいるのかを明らかにし、子どもの深い思考が伴うパフォーマンス課題の在り方について検討する。

【探究実習の研究目標】

1. 授業見学や質問紙調査を通して生徒の実態を把握する。
2. 生徒に深く思考させるパフォーマンス課題のあり方を検討する。

【探究実習の概要】

1. 授業観察を通しての生徒の実態把握

研究の対象は、佐賀市立A中学校（以下、実習校とする）の第2学年の生徒である。探究実習では、全3クラスの授業にT2として参加した。さらに、メンターの英語の授業についての生徒の感想から、生徒がどのような活動を好む傾向があるのかを考察した。また、朝の会や昼食時などの授業以外の時間にも教室に入り、英語の授業に取り組む姿勢や態度、そしてクラス内の人間関係に焦点を当てて生徒の様子を観察した。

2. 生徒に深く思考させるパフォーマンス課題のあり方の検討

メンターの授業を参観し、生徒の主体的な学びを促す指導法を学んだ。また、11月には第2学年B学級において、メンターの授業をモデルにT1として合計2回の授業を行った。その中で、「逆向き設計」論に基づいて構想されたメンターの授業の観察を通して、生徒の深い思考を伴うパフォー

マンス課題としてどのようなものが想定されるかを検討した。本研究では、「思考力」を外国語科における見方・考え方を働かせた思考力と定義する。そこで、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方とは何かを考えるとともに、パフォーマンス課題の在り方と、その評価方法について検討した。

【探究実習の成果と課題】

1. 成果

(1) 生徒の実態把握：生徒の観察や授業についての生徒の感想から、ゲーム性を取り入れた活動やリズムに合わせて単語を発音する活動を好む傾向があることがわかった。また、グループ活動における生徒同士の教え合いにも積極的な姿勢が見られる。さらに、生徒の中には長文読解や作文といった英語の読み・書きの能力を身に付けたいと感じていることが明らかになった。今回得ることができた情報を基に、自身の研究方針と生徒が授業に求めるニーズをすり合わせながら授業構想を行っていきたい。

(2) メンターの優れた指導法の学びと実践：「逆向き設計」論に基づいて構想された授業を通して、教師は生徒に単元末の課題を解決するために必要な知識やスキルを段階的に身に付けさせていることがわかった。教師が授業中に行う活動にはすべて目的があり、その一つ一つが目標を達成させるためのステップになる。生徒の主体的な学びには教師の意図的な活動が不可欠であると学んだ。

実際に授業を実践することで、一方的に教え込んでしまうという自身の指導の癖を知ることができた。本研究のねらいである生徒の主体的な授業への参加や生徒の深い思考のためには、教師が生徒の思考する時間を十分に確保する必要があることを学んだ。

2. 課題

(1) 質問紙調査とインタビューの実施：探究実習当初の計画では、生徒の実態を把握するために早期に質問紙調査を行う予定であったが、担当学級の決定時期が遅かったため実施には至らなかった。また、調査を実施する時期については、生徒や学校の実態を踏まえた上で検討する必要がある。質問紙調査では主に、生徒の英語学習の実態や意欲について明らかにすることを目的とする。3月までに質問紙による生徒の意識調査を行い、気になった生徒にはインタビューをすることによって、さらに詳しい生徒の実態を明らかにしたい。

(2) 見方・考え方を働かせて思考するパフォーマンス課題の開発：本研究では思考力の育成を目標としており、特に「見方・考え方を働かせた思考力」と定義している。見方・考え方については様々な捉え方があり、探究実習では外国語における「見方・考え方」とは何かについて考えるまでにしか至らなかった。今後の実習では、見方・考え方を働かせた思考力を授業での実践レベルで検討したとき、どのようなパフォーマンス課題の形が考えられるのかを明らかにしていきたい。

評価方法については、ルーブリックを用いたパフォーマンス評価を行う。メンターへのインタビューによって、実習校ではルーブリックによる評価を行っていないことがわかった。その原因はルーブリック作成の難しさにある。信頼性と妥当性の高いルーブリックを作るのには大きな労力と時間がかかる。しかし、本研究で育成を目指す思考力は客観テストでは測ることができない。深い思考を伴うパフォーマンス課題を検討すると同時に、生徒の思考力を測るルーブリックについて研究を進めていきたい。